

# 朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解（七）

駁逆の明治維新 — 反「ドイツ農民戦争」論、一向二揆、年貢半減策 —

北島 平一郎

大阪経済法科大学研究補助金による論文第七号

## 目次

### 第一章 新世紀

新世界発見、宗教改革、ナショナリズム

集団と個

市民社会 (civil society)

ルッソ (J. J. Rousseau, 1712-78) とジョン・ロック (J. Locke, 1632-1704)

### 第二章 絶対矛盾の自己撞着 (近代資本主義)

商品生産

中世社会の崩壊

エンゲル係数

マーキュリー (Mercury)

### 第三章 ギルドと資本家生産

世界植民地主義

ジャーニイマン (Journeyman)

ユニオン争議

第四章

ドイツ農民戦争 (1)

ルッター (M. Luther) の改革精神

反、エンゲルス「ドイツ農民戦争」論

宗教戦争

エンゲルスの没宗教テーゼ

第五章

ドイツ農民戦争 (2)

農民綱領一二ヶ條

福音書と各綱領

農民重課

ドイツ国勢

都市の改革案

ブルジョア民主主義

第六章

宗教戦争の前提

物質的欲望と精神的欲望

地獄極楽

ダンテ (Alighieri Dante, 1265-1321) の宇宙

源信著、往生要集

(以下次号)

## 第一章 新世紀

### 新世界発見、宗教改革、ナシヨナリズム

前稿に取り扱った維新太政官の年貢半減政策については、尚種々の考察すべき関連項目が多い。それは日本に於ける加賀を中心として表われた一向一揆の「百姓の持ちたる国」イデオロギーは如何なるものであったか、それと幕末、明治初期に頻発した農民騒擾と年貢半減策は農民の共産主義イデオロギーのあらはれたものではなかったのか等がまづ問題とされなければならない。そしてこういった農村、農民に於ける改革、革命指向の動向については、中世から近代に移る際に欧州にあらはれた農村一揆、所謂農民戦争（Peasants War）がその先蹤であることは疑いを入れ得ない（日本の土一揆もその範疇と考えるべきか）。

中世から近代への移行は実に欧州に於て大事業であった。このとき種々の当時驚天動地の行動、それに伴った施策が現れる。

コペルニクス（Nicolaus Copernicus, 1473-1543）の太陽中心説（地動説）が現れたのは一五三〇年であった。これで天地が文字通りひっくりかえった。大きな動きは次の三つに要約出来る。（1）新世界発見、（2）宗教改革、（3）近代ナシヨナリズム。これらは近代資本主義の発展、合理的思潮の発達がその動向の原動力となる。近代資本主義の発展は貨幣（money）の一般的使用、市場経済、産業革命、交易と世界貿易の盛行がその内容となり、これに伴い、会社、株式、銀行、為替等が付随的に発展する。合理的思潮はこれらの表象ともなり、また背景ともなる。（イ）論理

論 説 (logic) 、実験 (experiment) 、数学 (mathematics) がその三大指票であった。騎士 (knights) 、法曹家 (lawyers) 、僧

侶 (priests) は封建領国に於ける三大搾取者と云われたが彼等は新時代、新思潮と、就中近代資本主義の発達による経済的地殻変動によって旧来のよつてたつ地盤を掘りくづされ、新しい思潮と社会体制の中にくみこまれざるを得なくなるのであつた。

### 集団と個

中世を支配した「帝国統治評議会」(Reichsregiment) はその役割を終え、そこに新時代の旗主として「国会」(Reichstag) が現われる。中世的思潮は、集団が中心であるグループ的思考と行動であつた。これに對蹠するものは近代を開く個人主義の新思潮である。中世に於ては、団体的、組合的思潮が、社会的、産業的、政治的、宗教的全政体 (polity) をカバーしていた。ギルドから都市自治体、そこから封建的順位をさかのぼつて玉座へ、單一の王朝から全体としての世界的王制秩序へ、そこから法王に代表される教会秩序へ、これらがすべてその權威的階層主義につらぬかれ、またそれに従つて組織されていた。それらが崩壊の運命に逢着する。

そして近代ブルジョアの個人自治の觀念が、社会の全生活面に確立されはじめる。しかししてこの時期自由の觀念、行動はその意味では未だ充足的でなかつたと云はねばならない。この期の自由は、就中宗教分野に特徴的であつた。初期キリスト教の個人主義は顯著であつたが、中世に於てはそれは思索的自己満足としてあらはれ、組合的傾向の残存物をさえ払拭するのに程遠かつた。退廢的にして帝国北方諸種族に固有な活力あるグループ組織と觀念、種族的社

会、共産主義的傾斜、これらが中世社会を勃興させたのだが、思索的自己満足は無力であった。

これらの中からカソリック教会に対する反逆の芽はぐくまれる。カソリックの中世組合組織キリスト教に新宗教思潮としての個人主義の再生が力強く自己を主張しはじめる。宗教の主目的は何であるかが問いかけられる。それは究極に於て個人の救済でなければならず、その達成の手段は個々の人格が自ら充足的であり、自らが自らを救済するのであり、教会組織や教会の伝統は本来これに無縁であると喝破するのであった。ここに自由と個人主義思潮の根幹がすえられる。

## 市民社会

これら思想に於ける自由思潮は経済に於ける自由思想の発展と関連する。しかしひるがえって考えれば、経済活動に於ける変化が、必然的なものとなって種々の改革や変動を引起す地盤を形成するとも云える。

その場合そこに現れるものは市民社会である。市民社会の成立は経済の発展、近代資本主義の発達に不可欠であり、その成立した社会にのみそれらの生成が可能となる。

その中核は、自由 (liberty)、平等 (equality)、独立 (independence)、友愛 (fraternity) である。これらは中世以後の社会に、近代国家を発達させ、これらは各国家の指導原理となって夫々の憲法にこの四原則が軸となったツィー・ビー、ノット・ツィー・ビーが規定され、それらは今日人々の常識である。そしてそれがそうなっていない社会、国家に於ては人々は中世の残存物と経済の跛行性に苦しまねばならない。市民社会に於ては流通は自由に行われ、関所や

説  
関税に阻害されることばない。貨幣は統一され、交換は自由である。価値は経済の原則によつてのみ定められ、自己充足的である。拡大再生産を押しとどめる何ものもない。人間は独立であつて如何なる事物、事象にも従属せず、支配されない。如何なる人格的内面に対峙しようとも何物にも妨げられない。人々は社会的に共同し、共同社会、コミュニティ (community) の精神によつて社会を純化し、向上さす。これが社会福祉の観念にもつながる。

ニティ (community) の精神によつて社会を純化し、向上さす。これが社会福祉の観念にもつながる。  
ルッソーとジョン・ロック

日本について云えば、明治維新以来それは近代憲法をもち、市民社会を發達させ、議會主義、円満な選舉制の發達によつて大に近代資本主義を伸張させた。しかし征韓論、日清、日露戰爭以来のその朝韓中侵畧と日本資本主義の緊密水魚の關係は後にのべるとしても、日本市民社会の内在的關係はデモクラシーの哲理と実践からはやや遠いものがあつた。端的にいって彼等は市民社会の原理をあくまで人的上下關係にとらえ、天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず、という様な解釈をする。そしてその説明が、日本人には一番納得しやすい市民社会の説破となる。ルッソー的ボロンテ・ゼネラル (volonte générale) やジョン・ロック的民主主義思潮とは矢張り縁遠い。前者は幼児の自然的道德律への成長と知的自己充足の發達をとき、人は個々人の自然的人権 (自然状態) を捨象して、しかし、あくまで自由で平等な主体としての人間が集まつて全員一致の約束によつて人民となり、政治体即ち主権の全体精神を形成し、それがすべてを含む一般意思として全体の社会国家となることを説く。これが放棄に対する代償として人民が社会の全主権から分離し得ない立場を保證される根幹である、とする。ルッソーの社会契約説 (Contractat so-

cial, 1762) の中核である。

ルッソーは、人は社会契約に入る前は、あくまでも天衣無縫に自由であつたとくが、同じ考え方はロックにもある。ロックは、英国改革期に活躍しその一六八八年革命の擁護者としてあらはれ、王権神授説を排して、王は契約によつて国民に緊縛されると、説いた。個人が彼の新思潮の中核であり、個人的自由、教育、宗教、政治の立場から社会に於ける個人の役割についての熟慮に情熱をそそいだ。その説くところをみると次の如くである。(Two Treatises Government) 自然状態について、「われわれは、すべての人間が天然自然にはどういふ状態に置かれているのかを考察しなければならぬ。それは完全に自由な状態であつて、そこでは自然法の範囲内で、自らの適当と信ずるところにしたがつて、自己の行動を規律し、その財産と一身とを処置することができ、他人の許可も、他人の意思に依存することもいらぬのである。それはまた、平等の状態でもある。ここでは一切の権力と権限とは相互的であり、何人も他人より以上のものはもたない。同じ種、同じ級の被造物は、生れながら無差別にすべて同じ自然の利益を享受し、同じ能力を用い得るのであるから、もし彼らすべての唯一の主なる神が、なんらかの明瞭な権利をその者に賦与するのでない限り、互いに平等であつて、従属や服従があるべきではない、ということとは明々白々であるからである」(「国際化時代の人権問題」、田畑茂二郎、八二頁、岩波書店、一九八八年)。こういつた考え方は日本のデモクラシー論の中には中々出て来ない。二千年の権威社会を経験してきた日本人には半世紀のデモクラシー経験ではまだまだ改革には程遠いのであろうか。

ジョン・ロック、ルッソー共に自然状態の人間の限りなき自由をとく。しかしこの様な状態はもとより假定のもので、想像の世界であることは言う迄もない。王権神授説が一世を風靡して人心に投じていたのと比べれば、この方が

より信憑性があるうか、という程度のものである。しかしこの考え方が人々の心に受け入れられ、世界を動かす原動力となったのであるから恐ろしい。科学的というより人々の心という抽象的思潮が余程重大である。共産主義には、原始共産主義の实在を説く集団婚 (group marriage) のストーリーがある。即ち往昔結婚は、種族と種族が行い、個人婚は無かった。即ち兎の部落と亀の部落が、例えば満月の夜に集団結婚する、それ以外の結婚はなかった、というのである。誕生した赤子は夫々の部落の母のもとに属する。母だけが子の親であることを証明出来る。子供達は兎の子、亀の子ということになる。この実行に伴う社会は原始共産主義社会である。社会は源初に於て夾雑物のないおほらかな共同社会であつて、これが再現を資本主義社会に於てもはからはなければならない、というのがこれからする共産主義の主張であつた。即ちこの原始共産主義社会が崩壊するのは個々人が私的所有物をもつ様になつてからそれを守る必要が生じた為である。前者が即ち私有財産であり、後者がこの私有財産を防護する組織としての国家である、と説く。従つて楽しいおほらかな共産主義社会を作る為には、私有財産をなくしその附随物たる国家を捨象することである、と主張するのである。何れにしろ、科学的社会主義をとく共産主義であるからこの主張の根幹をなす源治共産主義と集団婚の实在をプリミチブ社会の存在とその実行を証明することで充足しようとする面も強い。そのことは中々一般の納得を得難く、またその実例への実例的反論もあつたりして確定しないが、何れにしろこういった源治共産主義の主張も、大綱に於ては、人類が理想郷を求める点に於て社会契約説、人類の自然状態説とえらぶところは無い、と云はねばならない。中国の神仙譚や桃源郷譚、キリストの千年統治、最後の審判等もその思想的並列状態は同じで、人類の楽天的理想を求める心魂の生み出したものと云える。その意味ではすべての宗教そのものが根元に於てそうである、と云えるのであろう。



## 第二章 絶対矛盾の自己撞着（近代資本主義）

### 商品生産

人間が自由を求め、封建的規制を打破する願望と実践は、いまみた様に社会にあらはれたが、その中核の変化をもたらししたのは、経済活動であり、その運動方則に従った政治、社会、経済活動に於ける自由希求であるが、その変化の中核中の中心は、経済活動に於ける商品生産の開始とその発達であった。

内外の交易に於て、商品を生産することが行はれて経済的拡大生産とその再生産は無限となる。その中核の中心のセルは利潤である。人は利潤を得ることを知って経済活動の目的はそこにすえられ、これが何百年の経済発展と幸福を人類にもたらし、同時に万斛の破滅と害悪と恨みを人類に藏せしめた。利潤こそはパンドラの箱であった。莊園経済に於ては経済活動は自己充足的であつた。封建社会に於ても同様であつた。そこには余剰生産物をつくり、これを自己目的以外の使用に供して販売し、利益を生むことをのみめざす実行は無かつた。生産手段の発達と生産力の増強が余剰生産物を生み出す。それと共に余剰生産物を交易する実行が生まれ、手段は直ちに目的と化して販売を目的として余剰生産物をつくり（商品生産）、これから利益を得ることが経済活動の日常茶飯事となつた。今日の経済の誕生である。商品経済、市場経済の誕生であつた。

こうなるとここにこの交易、流通をたすける血液が必要で、ここに貨幣が一躍表面に躍り出た。貨幣は往昔は余剰生産物交換の尺度また媒体として機能しているにすぎなかつたが、これが商品流通の媒体としてそれを牛耳る様にな

ると單なる手段から交換流通を支配する様になった。流通の尺度として貨幣が交換の必然的目安になってこれなくしては流通が行えなくなった。その価値の尺度を価格と名付ける。ここに商品生産、貨幣の媒体、価値の尺度としての価格の関係が生じた。そして交換の手段にすぎなかつた貨幣が今度は商品生産の目的となつて、交換の為の商品生産ではなく、貨幣獲得（金儲け）の為の商品生産、流通（商売）と変貌した。そしてこれは商品による貨幣の獲得（金儲け）にとどまらず、貨幣による貨幣の獲得（貨幣価値の相異と投機、資本（株）への投資と投機）へとすすむ。こうなると貨幣は金融資本となつてその動向と決断が経済を支配することとなり、金がかたきの世の中から金が支配の世の中となつてしまつて、その支配はローマ帝王、諸侯、貴族の支配よりも恐ろしい火を吹くドラゴンのそれとなる。その前には、人類は地底にうごめく亡者の如きものか。

### 中世社会の崩壊

この経済の発展のプロセスの中で荘園経済や封建経済は跡かたもなく流失する。土地だけが財産であり、これを守ることが至上命令であつた封建経済は、土地以外に貨幣の蓄積という財産ができることとなり、しかもこれが経済の第一義となつて、土地もこの体制に組込まれてしまふ。土地の貨幣化であり、その価値の尺度が価格で表示される。こうして土地に緊縛されていた農奴は必要上解放され、土地で働く賃金労働者となるか、土地を借りて地代を支払い耕作する小作人となつた。領主（土地所有者）は地代を収納するブルジョア的地主となつていった。この発展プロセスはもとより国々に遅速があり、英国では封建的身分制的君主制をブルジョア的立憲君主制に変化させた段階でブ

ルジョアの地主が発展した。ドイツではこれに対応する時期未だ農奴制が残っていた。

莊園経済や封建経済が崩壊するのは右述の原因によるが、その様なことよりも更に重大なことは土地生産（農業）が單純再生産しか出来ないことである。土地生産を拡大再生産にもちこむことは不可能である（二毛作、三毛作、新田の開発は極めて限定的である）。これに反し、工業の世界では拡大再生産が属性である（法學紀要二八号、第五章明治維新の国家的性格、私有財産制と共產主義、ローザ・ルクイセンブルクとオットー・バウアー、葛藤の資本主義論等参照）。無限に發展してやまない拡大再生産工業とこの農業では、農業第一次産業制の国家体制がその存立の道を前者に譲るのは当然のことである。こうして農業は第二義産業へと転落せざるを得なかつた。

もともとどんなに量質を改良しようと拡大再生産が不可能な農業は内外の土地集収を除くと一方拡大再生産を無限に継続する工業生産とは性格を異にし、これら二つを並存して發達させなければ平等の發展が望めない經濟構造にとつては、この並存は本来出来ない相談であつた。

ここから農業をそれとして發達さすことを断念した近代經濟は農業を利用してその工業的拡大再生産をはからねばならなくなる。それが、例えばプロシヤの Junker（大地所有者）がその農業収益を工業その他に投資して農業を間接的に拡大再生産に結びつける方法とか、英國が農地を牧草地にかえて羊を飼育し、これから羊毛を収得してこれを織物業として農地を再生産し、拡大再生産に結びつけるやり方とかが生れてくる。

尚米合衆國、帝政ロシアともに一八六〇年代、前者は内乱（南北戦争）に於て、後者は農奴解放令に於て共に農奴を自由人とし、それは政治の世界では割期的な偉業として稱讚的となるが、前者は農奴を解放して農業を近代化し、後者は農奴を自由人としたが、共にそれで農地が拡大再生産を行うということもなく、前者は政府が農業を一手に引

説 受けて農業政策で補助金問題をもって苦勞することとなり、後者は農奴解放の實質的措置として収入減を補う為農奴

論 が自由人身分を得る為には、その保証金を取立てるといふ実行となり農奴にとってはこれを支払はねばならなくなるという、解放されてかえつて賦課が拡大し、しかも追々その質券が金券化されて流通し、その持主が農奴を収奪する

ということにもなつて、ミイラとりがミイラになつてこれが、一九〇五年、一七年のロシア革命を醸成したとされる結果となつていつた。

### エンゲル係数

農業と工業を併存させ、双方を平均して發展させ、デモクラシーを鼓吹するというのが、人類の理想であり、近代經濟の大命題であるといふのは誰にもわかる理屈であり、何人もこれを希求する。

しかしそれはみた如くもともと不可能な現実である。工業(A)が主となり、農業(B)が従となるという關係が実は人類生産と消費の基本型とならねばならない。それは誰でも心底で知つてゐることである。これが冷徹な現実でなければならぬ。A、Bが均衡していても事態は悪い。そしてA、Bを均衡さすことをデモクラシーの本質からはからはれたとしてもすぐ事態はAがBを従属さす様に經濟は發展するのである。人類は自分が生産し得るものの何割かを衣食住に費すことによつて今日の無限の拡大再生産を果たし、尚その増大を展望している。人類が作成したものと同量のもの全部食べてしまはなければならぬとしたら人類の發展は無い。ここから二つの相反する命題が生れる。

(一) 生産を出来る限り増大さす為、人類の個々の費消を出来るだけ小さくしなければならない、といふこと。

（二）人権とデモクラシーの概念から農業を工業の水準と同じ高さにもつてきて維持しなければならない、ということ、これである。人類はこの二つの矛盾する命題の中に不可能を可能とする為種々の理論と政策と実践を生んで、失敗し、結果、大災厄をこの地上にバラまき乍ら今日迄何とか生き永らえてきたのである。矛盾のワダチの中にギンギシと骨身を削られながら、悲鳴をあげながら生きてきたのである。

農業が主たる産業であつた封建経済に於ては、他の業種、階級の生活と生産活動、その他をすこしでも楽にし、余裕を持たす為に、他の業種のすべてがよつてもつてたつその基盤経済である農業を、出来るだけ低価格におさえることを目指し、また支配階級の生活を少しでも向上可能とする為にこれを可能な限度まで搾取したのであつた。農業が他の産業すべてを喰いつくさない為である。近代経済は農奴を解放し農業を工業と同じ基盤に置く政策を追及して前述の如く苦患を展開し、継続する。

ここまでで、農業に拡大再生産は無く、それは近代資本主義にくみ入れられた場合、プロシヤのウンカーや、英国の困い込みによる織物業営業等の他には、農業は自ら資本主義経営とはなり得ず（拡大再生産が不可能だから）、近代資本主義経営活動体制の客体となる以外道はなかつた。そして近代資本主義活動の客体として、主体とはなり得ず、貨幣経済と市場経済にくみ入れられてその悪影響をもろに蒙らねばならなかつたことをみた。価格はインフレを起して進行するのが資本主義経済の実体であり（大小遅速の差はあるが）、それあるが故に世界は二〇世紀の終りに於て、その価格は一世紀前、半世紀前の価格の何百倍となり、早い話、日本でも明治の一円、大正の一円、昭和の一円と段々インフレとなり、平成の一円がどれ位の価値を蔵しているかを一寸考へただけでこの事はまさに思い半ばにすぎることがある。こうして米の価格は近代資本主義経済の中でも、他の物品に対し（イ）エンゲル係数的に相対的低価格と

説 ならざるを得ないこと、(ロ)米以外の工業製品や他の諸物価の競争場裡の市場経済では米の価格はこれらと太刀打

論 ち出来ない静的なものたらざるを得ないこと(自分主動で価格を支配出来ない)、等で米は市場経済では常にそれこそ冷や飯の立場におかれなわけにはゆかなかつた。

それが米の価格、農産物の価格を他の工業製品と平等、同等、もしくはそれ以上に設定する民主主義価格体系のもとは経済は常に安定せず、混乱を背景とし(米価を高くすれば、工業製品は直ちにそれ以上となる運動法則をくりかえす)、ときには頭デッカチとなつて国民生活を破壊するのである。

①安い米を食べ、②安い賃金で働いて、その何倍、何十、何百倍の余剰価値を生み出し、安い米と安い賃金をもとに生産された③安い工業製品やその他の製品を流通さす、といった耐乏型経済は今日的ではなく、またお呼びでは無い。しかし資本主義ではそれ以外経済の安定した発展は無い。これも早い話、①と②を利用し、もしくは国家権力を用いてこれらを造出し、③を高い工業製品として貿易を行う、ということを実行すれば、この経済は安定大発展するが、それは重搾取経済となり、革命の温床となる。そしてそれが歴史の示すところの各国民経済の眞の姿であつた。近代資本主義の矛盾、(一)生産は需要を常に超過し、商品生産がつづく限り不景気は慢性的となる。倒産、失業の増大。失業者ヒットラーとムッソリーニがその大災厄をもたらした。(二)農業は工業に従属する限り経済は安定する。(三)日本戦後の経済発展は朝鮮戦争、ベトナム戦争の戦時特需の思恵以外の何ものでもなかつた。

マーカーユリー

レセ・フェール、レセ・パセで経済は首尾ととのい、インビジブル・ハンド（見えざる手）に導かれて各々の国民経済は自らを充足する、と説いた一八世紀経済学は、一九世紀から二〇世紀になると経済に倫理観が高調せられることとなる。マックス・ウェーバー、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神、一九〇五」。しかし泥棒と経済の神さまが同一のマーキュリー様であるという現実、経済の倫理等は馬に喰はれてしまえというリアリズムの前に無力化してしまふ。平成日本の経済現象では汚職、贈賄、詐欺、粉飾決算等々は枚擧にいとまなく、毎日の新聞はそれらの記事で埋まっているといつて過言ではない。金を貸して貸し倒れとなり、回収不能でそれを救う為に国民の血税を所謂貸し倒れ不良債権処理に與へる。その貸し倒れを今度は誤魔化して過小申告をしてそれがバレて罪人が出る、という状況で、凡そ、平成日本の経済は経済ルールの働く資本主義社会ではなくなつてしまつた。

巨大金融資本が世界の株式、為替市場を牛耳り、多額の金を投資したり、引き上げたりして一国経済を滅茶苦茶にし、それが各国市場経済に直接影響して世界経済を擾乱する。矢張り安価な原料と労働力で生産を行い、これを搾取するものがない（前述①、②、③をもととして）、そういう社会が実現しないと経済生活は安定しないのであろう。しかし経済活動から利潤追求を捨象することは出来ない。そうすると現在の混沌たる社会経済を肯定する以外は無いのである。

農業生産に於ては根本は不拡大生産であるからそこから得られる利益は一定している。それは領主や地主が、年貢を収納しようが、ブルジョアの地代を収納しようが、全く同様である。土地が不動であるから収納の形態は変化しても収納の量は同じことである。

そこで農業から出来る限りの収納をおさめようとする場合は、農民のわずかなとり分をけずるだけけずつてこれを

説 領主なり貴族なりの収入にしなければならぬ。五公五民を六公四民、七公三民とする謂である。これが農民の激発を招き一揆となる。それが頻発し、日本では一四、五世紀から土一揆、馬借一揆等が起り、江戸時代でも後期、幕末には種々みられ、大変な状況であった。今日これら一揆の指導者の犠牲を日本中そここで掘り起し顕彰することがさかんであり具体例にはこと欠かない。これを町おこし、村おこしの目玉としているところも色々ある。

ブルジョア地代になるとこれは貨幣経済、市場経済に組み入れられて利潤法則に支配され、地主の意図やおもわくは土地から切りはなされてしまう。その運動の中でブルジョア地主は没落を回避する為ブルジョア政権と抱合する方向にすすんでゆく(追々旧型地主は商人、高利貸し等の新地主にかはられる)。これが封建経済から近代資本主義経済への転換の中核的要因であった。

### 第三章 ギルドと資本家生産

#### 世界植民地主義

この不拡大、單純の再生産の農業を無限の拡大再生産(土地の拡張、植民地の獲得)に導いた豪傑が出た。それが、国では、スペイン、ポルトガル、人では、ヘンリー航海王子(Henry the Navigator)、バスコ・ダガマ(Vasco da Gama)、ディオゴ・カム(Diego Cam)、ディアス(Bartholomen Dias de Navais)、コロンブス(Christopher Columbus)、マゼラン(F. Magellan)等であった。これらの人々の業績については既に取扱ったので繰り返さない(北島平一郎著作集



第三卷（4）近代外交史三つの視点への試論。彼等は所謂地理的世界発見で地球を一つに結びつけた。法王アレキサンダー六世（Alexander VI, 1492-1503）の法王境界線（ベルデ岬西方三七〇リーグの南北線）をもって西方未知の大陸を、それを発見した国（スペイン、ポルトガル）に適當に割当てるといふ御墨付の下で彼等は印度海岸、東南アジア諸国、フィリッピン、南アメリカ、中米、北米、カナダ等の夫々の土地を続々と植民地化していった。即ち土地を獲得して農業の拡大再生産を果たしたのである。前者の地域はポルトガル、後者はスペインに帰属した。これらは後、阿蘭陀と英国が競争に加わるに及んで覇者交代となりスペイン、ポルトガル共に後二者にその地位をうばわれてゆく（近代国家と世界植民地主義「法学研究所紀要二五号、一九九七・九参照）。こういった緊縛的、静的農業が加重搾取以外収益を増大するのは、他土地の獲得以外なく、その為世界は種々の型態の植民地主義を發明し、残酷にその実行を継続した。これは一応第二次世界大戦の終結と共にやむ如くであるが、ヒトラー、ムッソリーニ、昭和天皇の植民地主義が地球上最後のそれであったことを祈らざるを得ない。

貨幣がいままた如く強烈な溶融剤となつて封建主義をとかしつくしてゆくが、その目的点は、封建国家が近代国家となつて中央集権的官僚主義国家の誕生、形成となることである。Reichsregiment から Reichstag への移行も勿論その一つの要素である。騎士の実質的変質は戦争の性格が追々総力戦、近代戦に変貌してゆくにつれて起つてくる。騎士、貴族の権威と地位が名目的なものとなつてしまふ。諸侯や貴族の経済的基盤は封建主義社会体制の弛緩となつて多くの土地なき民や、半自由半農奴（villain）的農民を生み出し、これらはプロレタリアート化して追々強大になつてゆく都市に吸収される傾向を生み出す。

中世から近代へ移行する過渡期的現象は長く続くが、それは右述の様々の要素を含んでこれらを顕在化してゆく。

近代資本主義生産へのプロセスは生産形態の社会的変化としてこれらの中で明瞭な姿をあらはす。生産は荘園経済体制から都市ギルド生産へ移る。例えば、靴職人は最初、自ら原材料を購入し、自己の技術をこれに施して靴を製造（生産）する。その使用する道具も彼自らの所有である。そして製品（靴）を自ら消費者に直接販売する。経済的に彼は企業の各エレメントを自己の手中に保持している。そこへ生産形態の変化が導入される。

まず資本家と技術者の分離である。即ち単一階級であつた職人を分化し、資本家（entrepreneurs）と賃金労働者を生み出す。資本家は独立であり、資本を所有し、これを企業に投資する。彼は原材料を所有し、道具（生産手段）を所有し、作業場（工場）、最終製造物（商品）を所有する。そして商品を販売し、利潤を獲得する。資本家はマネジャーを通じて生産の各段階、品質管理、販売等を規制し、監督する。

労働者は最初から従属的にはあらはれる。彼等の所有するものは労働力だけである。（しかしこれは労働力の高度化、知識化で、労働力は高度の知力と教育を必要とするに至る。しかし雇傭の本質は変わらない。）そしてこの労働力を資本家に売ることによって賃金を得る。資本主義とは一面、この分化、つまり、資本の所有者と労働力の所有者とが分れ、この組織が生産プロセスを支配するものと定義される。ヨーロッパに於て産業的变化は、一四六〇年から一〇〇年間の間に行はれたと云はれる。この間の資本家的生産と稱されるものはまだまれ、とされるが、追々私的資本家が社会に出現してくるのである。この組織の下では、従業員は、賃金労働者である。この場合従業員中親方（熟練者（craftsmen）と見習（apprentices）は賃金の質に於ては同等である。雇傭主は資本を所有し、前述の如くこれを企業に投資し生産の全過程を統御し、監督する。賃金と労働日がきめられる（勿論労働法はまだ整備されていない）労働条件はきびしく、つらい。この時代、国家資本主義が前面にあり、国家所有の企業、即ち軍事産業が国民を徴兵

の如く雇傭した。即ち国家のみが資本を所有できたと云はれるのである。

### ジャーニイマン

この国営企業、主に軍事産業とならんでこの時期一般的であったものは、独立の小技術者経営であった。テーラー、手袋メーカー、帽子屋、靴屋、刃物師、おけ屋、パン屋、彫師等々である。社会の生産、流通はこの段階でこれらの人々の手によつて遂行されていた。彼等は夫々小さなショップをかまえており、流通だけを扱う商売は後の発展となる。彼等は街に住み、閉鎖的で、家父長制、弟子(徒弟)を一、二名もっていた。彼等が組織し、従属していたのがギルドであった。同職種の店々が集まっていたところもある。日本では、金座、銀座、問屋町、菓罐町、竹屋町、瓦屋町、鎗屋町等。ギルドは組合を強固に組織し、排他防衛的で、組合員を強く規制していた。品質の標準、規格を定め、徒弟の修業規則を守らせて高技術を維持し、競争を制限した。ギルドホールをもち、教区を形成してその教会を維持し、組合員はこれに従属した。彼等は独立であり、高く維持された技術を誇っており、中庸な財産を有して、労働を他に売ることが無く、職人気質である気位が高かった。この機能ギルドの解体過程の中から、前にふれた近代資本主義と資本家が現はれてくる。職人は夫々の親方の下で修業し、年期奉公を勤めあげて一人前の職人(ジャーニイマン)となる。後はこの后機会をみて自ら親方となつて自立することを許される。これが職人↓親方の一般的プロセスであった。しかしこれが滞つてきた。もともと親方をふやすことは競争の忌避からむつかしかった。また親方から彼の子息へという世襲制が一般化の傾向をもつた。そこへ職人の数が追々増加して親方免許が一層困難になつてく

説  
 論  
 る。それは職人の技術の高度化という現象となり、そのきびしい試験に通らないとジャーニイマンになれなくなってきた。これにともない製品が複雑高品質となって普通の需要水準を越える様になった。こうして機能ギルド製の維持は社会の発展を阻害する。(二、三百人の採用試験に数万人の若者が押しかけるといような社会、金利がゼロにされて長い間それが維持されるという様な社会即ち、夢も希望もない現実が、動かし得ないそれはすでにそれとして老耄期に入っていて、権力者以外一般の生活需要に応じられなくなっている)。ここから

① 親方がジャーニイマンを集めて商品生産を行う実行が現れる様になった。そしてこの親方経営者は小資本家となり、ジャーニイマンは労働者となった。両者の間に労働契約が結ばれることとなる。こうして機能ギルドは社会の要請にこたえる。

② 英国の囲い込みやプロシヤのユンカー産業投資のほか、ドイツ南部でもギルド社会の解体がはじまる。即ちここでも主として織物業が親方たちを買収して労働者とする。親方附きのジャーニイマンも同様である。資本家は下請け産業システムを発展させ、親方やジャーニイマンを商人が介在して織物業経営者にうりこむ。この生産関係は、街々で起り、相互に交流する。街の規制やその統制は無意味となり、かえって有害となつてとりはられる傾向となる。この経営の機能ギルド解体吸収は当然規模がおおきい。これは当時他の全職種の約半分の雇備をもつ、といはれた。

### ユニオン争議

ここから早くも労資契約があらはれ、労働者となったジャーニイマンはユニオンを形成するという事態が生起する。

これはニューヨーク等に於て一五〇〇年には明確な姿を帯び、従来ギルドの親方徒弟といった族長的家族的雇傭関係は完全に払拭される。

しかもこれらのユニオンは市街の内外で共同するという事態となる。彼等は賃上げ、よりよい給食、労働日短縮、有給休暇等の要求をかかげるに至る。ニューヨークのブリキ職人が結束して資本家に反抗するという事態がこの頃起り、手織の要素の強かつた職種とユニオン間の結束のため、代替労働者をみつけることが出来なかつた資本家側は大いに痛手を蒙つた。資本家側も組合を結成、これに対抗してウェーゼル、マインツ等で労働者を押えつけた。しかしこうした紛争は、もとより労働組合が発達した時代の労資紛争とは様かはり、メイドと主婦達の間の葛藤に似たものであつたという分析もある。

この時期激烈な労資紛争は、リヨン、パリなどで起り、騒擾をかもし出した。しかし争いの結果は、ほとんど資本家側の勝利に帰し、ストライキや騒擾を禁止する勅令や布告等も種々出された。こうした変化の中で、騎士階級や小貴族は追々困難な立場に追いこまれるが、一方土地なき民や貧民、プロレタリアートといったものも現われ、社会の底につき重ねられる様になつていった。

#### 第四章 ドイツ農民戦争 (1)

ルッターの改革精神

ドイツ農民戦争が起つた時代の直接的背景は右述の如くであつた。こうした過渡期に激しい騷擾がドイツの農村にも起つてくるのである。所謂世界地理的新発見という名の世界植民地化と共にあらはれた宗教改革の波とドイツ農民戦争は深くかかはりをもつ。それはフス (Jan Hus) から始まり、カルビン (John Calvin)、ツィングリ (Zwingli) と続くその鯨波の中でドイツの改革精神を代表するマルチン・ルッターの革新が大きな影響をもつのである。(経法大法学研究所紀要、二八号(一九九九・三)「朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦解(四)、第一章、ヘンリー八世と英国国教会」参照)

宗教改革はキリスト者の内面の発達と、ローマ・カソリックに対する様々の批判と抗議の中からまき起つてくるが、ルッターの立場はこれと表裏をなすものであつた。彼は修道僧のはじめから自己の宗教的精神に様々な疑を抱き、命はてる程の勉強に身をさいなんだが、自己の罪の意識とキリストの救いの葛藤の中におこる煩悶を解決出来なかつた。それをとくのは、ルッターのキリストと神に対する自らの力による信仰の理會であつた。即ち自らの力であつた。キリストが十字架上で示した人類を救うあわれみのところを信じてゐた。この信じの中から神に選ばれたという信仰が生じ、神が罪びとを自らの子とする大義を得、神があわれみの心をもつて信仰に生きる人々を有意義とするのであつた。ルッターはこの悟りによつて諸々の煩悶と苦難を氷解し、豁然とした大道に出て、天国の門が自分に開かれたと信じたのであつた。

しかしルッターの宗教改革はこのルッターの内面的信仰の悟りによつて展開するものではなかつた。勿論それはルッターのキヤラクターとして彼自身から切りはなされるものではないが、ルッターの改革は、彼がウィッテンベルク城教会の門にかかげた九五條に及ぶローマ・カソリックと法王に対する弾劾の中から出現する。

宗教改革は時代の趨勢と要請のしからしむるところであるが、その目標は二つあり、ローマ法王の独裁とカソリック体制の独断と偏見に対する反抗であった。そのピークの一つはヘンリー八世による英国国教会の確立(一五三三)であるが、それにもルッターの教説と行動が大きな影響を及ぼした。権威に対する批判、独裁と独断の破棄という革命精神が諸々の当時改革運動の星であった。ルッターの弾劾はまず法王無謬説の駁撃であった。法王の救いは、洗礼、堅信礼(成年信仰の確認)、最後の晩餐、さんげ、宗教儀式、結婚、清めの塗油等を通じて行はれる、という絶対性に対しルッターは神と信仰についての先述の自説を展開した。

(一) 免罪符。ルッターが最も激しく攻撃したのはこれであった。人々が死后行く煉獄の苦難はこの護符の購入によつてまぬがれ、または半減されるという教説への反抗である。キリスト、聖母、聖者によつて積み重ねられたと稱される功德を法王が肩代りするというのであったが、これが人々の内心の反撥を呼び、その反対をルッターが声高く表明した。

(二) 聖者の教説に反対。当時聖書の全篇というものは未刊行で、キリストの教えは高位聖職者の教説によつた。ルッターははじめて聖書(新約、旧約)を独訳し、聖者の独断と功德の積み重ねを否定し、キリストの教えは聖書にのみよるべしとした。

(三) 最後にルッターは免罪符について、これが(イ)安心の誤つたゆるしを教え、(ロ)救いの觀念を危険にさらす、として反対した。平安と罪のゆるしは、信仰を通じてのみキリストの言葉によつて行われる、人がこの言葉を信じることがなければ、彼は法王によつて何百万回許されようと心の平安は決して得られることは無い、と彼は喝破したのであった。

論

ルッターの九五條は、忽ち人々の心をとらえ、ルッターは改革と救いの導き手となった。すべての改革の先達となった。これがドイツ農民戦争の勃発に指導的役割を果す。この農民一揆が、宗教的色彩を濃厚にあらはすのは興味深い。後にとく日本の一向一揆は、宗教家眞宗八代教主蓮如に直接導かれたというより、ひきいられた農民戦争であり、またジャンヌダークのことはおくとしても、日本の島原の一揆（一六三七—三八）は、天草四郎時貞という少年に引具されたローマ・カソリックの日本信徒と信仰によって戦はれた。これを松倉（豊后守重政・勝家）家との支配、被支配との関係にのみ収縮し、そこに重点を置いて論ずるのは間違っている（宗教戦争という従来の説の方が正しい）。ルッターは宗教家として農民一揆に影響したが、しかしこの場合ルッターには革命と暴動への宥恕は無かった。これを左翼人士は、ルッターの限界とみる。彼の改革は教会と法王へのそれで、且つブルジョアの改革の領域にあった。革命への傾斜がドイツ農民戦争の中で運動の必然的帰結として盛り上がって来、ルッターの宗教的始動はうしろへ押しやられ、ミュンツァー（Thomas Munzer）派の主張と行動が盛行すると、ルッターはこれを攻撃し、「殺人略奪の農民暴徒を排撃する」というパンフレットを書いてこの暴徒は神の許しを賜わざるものとして、彼等を打ち殺すことを領主に勧告するに至るのである。

これを当然の事ながらエンゲルス（Friedrich Engels）は彼の「ドイツ農民戦争」（一八五〇年七月、伊藤新一、土屋保男訳）に於てルッターの裏切り、背信としてあくなき攻撃を加えている。それはこの彼の書物が根本に於てプロレタリアートとその革命を勇気づける目的で書かれているので所謂テーゼ的な目的をもつと考えられる。レーニンの



諸著作と相似したと考えて可であろう。ドイツ農民戦争の日時、場所、規模、主謀者、結末等を詳細に克明に誌している。歴史書とか科学的な研究書といった面はそこに限られている如くである。そこから結論としてドイツ諸侯が残り、貴族、都市、都市平民、農民が壊滅的打撃を蒙り、一八四八年の革命の失敗と相似た状況が作りだされたとしている。これをもたらししたのは、こうした要素の分裂の結果であったというのが「ドイツ農民戦争」の言わんとするところである。しかし一八四八年の革命は一五二五年のその失敗を甘受出来ない。一八四八年の革命の背後には勝者として大諸侯、オーストリアとプロイセンがたっている。その背後には近代ブルジョアが立っている。彼等は諸侯を急速に屈服させている。そして大ブルジョアの背後にはプロレタリアートが立っている。エンゲルスの究極言わんとするところは、これである。プロレタリアと大ブルジョアの対置である。マルクスが一八四八年、共産党宣言をあらはして共産主義を鼓吹したのとこれはここへきて大きなツロクをなすのである。ここにこそ「ドイツ農民戦争」執筆の眞の目的が明確に観取されるのである。

### 宗教戦争

ドイツ農民戦争は、ドイツ南部ウエルテンベルク、ババリア、チューリンゲン等で生起した。その決起の動機、要求、目的等はすべて宗教の信仰にみちびかれたものである。即ち一大宗教戦争であった。二年間これはこれら地方で荒れ狂い、スイスにも呼応されるが、戦争の結果は結局惨敗となってやむ。騒擾が後期トーマス・ミュンツァーの指揮の下に過激な様相を帯びるが、ミュンツァー自身捕縛されて処刑され、ここを以て農民戦争は圧殺される。ミュン

ツァー自身もしかし宗教的情熱の下で自身のたたかいを組織し、遂行するのである。

農民戦争のいま一つの特長は、この騷擾で貴族、諸侯は地盤をほりくずされ、都市も打撃を受けるが、この種の荒廃の中から皇帝 (Emperor) がひとり力をぬきこんでる。ヘンリー八世が英国国教会を確立することは前にふれたが、同様宗教改革は、一般的傾向、欧州の指向としてローマ法王権に対する各国プロテスタント・ナシヨナリズムの挑戦となるのである。

このドイツ農民戦争の宗教的みちびきについて次に考えねばならないが、これが日本の一向一揆と全く質的には同様の宗教戦争であったことは看過されてはならない。一向一揆は全く眞宗八代の法主であった蓮如に統率されたもので農民立国を志すという日本では稀有の社会現象であつてその興りは加賀の一向一揆勃発 (一四七四年七月) からとされる。ドイツ農民戦争が二年で全く弾圧されるのとははかり、一向一揆は数々の戦いを行い、これらで加賀の守護、富樫政親を敗死させ、朝倉氏と激戦し、また織田信長とは大阪石山本願寺となつて一五六九年から一一年間戦場で相まみえる。ものすごい勢力である。その終焉は一五七五年織田軍団の越前攻め、朝倉義景の敗死によつて前田利家が一揆を攻畧平定することから結果する。その間百年といはれ、一向宗は、蓮如から二一代の顕如となつていたが、この長期に及んだ百姓一揆の支配「百姓の持ちたる国」現象はまことにローマ以来世界史上瞠目の事実であつた (但し越中、能登、越前、加賀以外は「百姓の持ちたる国」宣言以来一年間の命脈)。蓮如は戦国大名であり、一揆は戦国軍団であつたという解釈は、その沿革組織から不当である。「百姓立国」を導いたものはあくまで一向宗 (眞宗) という宗教であつた。このことを忘れるべきではない。

エンゲルスの没宗教テーゼ

このドイツ農民戦争の宗教性を全く没却し、これを領主や貴族と農民の階級闘争であり、苛斂誅求とそれへの反抗であるという純粹科学的、社会主義唯物史観の極めてせまい範疇につつこんでしまつて身動きならない様にしたのが、エンゲルスの「ドイツ農民戦争」であつた。だからこれからドイツ農民戦争の史的、経済的、社会的、国家的、欧州的的理解を得ようとしてもそれは木によつて魚を求めるといふことになつて結局何が何やらわからなくなつてしまふ。ただ生起したドイツ南部諸地方の農民一揆を史眼抜きで次々克明に記述羅列しただけがエンゲルスの「ドイツ農民戦争」である、と云はねばならない。エンゲルスのこの著述の目的は、歴史をかくのではなく、一八四八年革命への鼓舞と所謂テーゼの提起にあつたことは前にふれたが、エンゲルスにしてみれば、魚を求めていないのに魚がない、魚がない、と騒ぐのはの疝氣を頭痛に病む類で、問題外だと云うだろうが、この書物のこの叙述についてはまことに看過できない悪影響がある。

何しろ、マルクス、エンゲルス、レーニン、ソ連革命と云えば泣く子も黙る。名が大きすぎる。そこで純粹科学的研究はすべからかくあらねばならぬといふことで、エンゲルスのテーゼも科学と読み誤り、これに追隨する社会科学方法論が一世を風靡し、尚今日でもその方法論弊害はとどまるところを知らない。特に日本では何かの問題を論ずるときには、事実だけを克明にしらべあげてその時日、関係人物、場所等動かしがたいものだけを羅列するといふことが流行し、これが正統あやまりなき純粹社会科学だと自得主張することになつてゐる。凡そ独自の史観、判断、肘度、予見等一切の主観をしりぞけて客觀的事実の動かしがたいものだけを克明にならべるのである。つまりドキュメ

ントをしらべあげてみせるというのである。しかしドキュメントはあくまでドキュメントで、素材をいくら発掘してならべてたててもそれは歴史ではなく、理論ではなく人々の理解に資することにはならない。つまり素材を全部食卓にならべて食べるといっているのと全く同じで、料理というてつづきを省略してしまっているのである。そしてこれが純粹社会科学だといっているのです、その源流の一つがエンゲルスのこの「ドイツ農民戦争」にあることは疑いを入れ得ない。困ったことである。

エンゲルスがドイツ農民戦争で宗教という一大原因を全く捨象してしまつて、事実だけを客観的にならべてきたので、日本でも宗教を歴史の事実のなかにいれなくなつてしまつた。ギリシヤ、ローマ以来宗教が世界をうごかしてきたのだが、これをとり去つて一体事件をどう解釈説明するのかわからない。日本のある宗教の宗派は不立文字というて經文の一切を勉強することをやめて、ひたすら結跏半睡のあぐらの中に悟りを得る、ということを実行しているのだが、宗教戦争の宗教を捨象して不動の事実のみをならべるのは、結局この類いであろうか。日本ではこれをやるので、宗教戦争の島原の乱から天草四郎時貞をきりすてしまつて、この名はこの世紀の代り目の、中、高等教育の教科書からきえてしまつている。

一向一揆は宗教戦争なのだが、これも一向宗や蓮如の名前は重視されず、一五世紀から一六世紀にかけて応仁の大乱をふくむ当時類発した土一揆と同じカテゴリーでこれを解釈しようとしている。そしてそれが純粹社会科学的方法論ののつとつた絶対無謬の眞正社会科学だと信じているのであるから始末が悪い。農村一揆はすべて領主の搾取と農民の反抗で説明出来るとしてすべてをこれで割り切ろうとする。これが従来の主観的史観に基づく歴史解釈という古い方法論を破りすて光明に輝く新歴史解釈だとしているのである。しかしそれが誤つていることは言うまでもない。

歴史の新解釈としてはこういう説もあつた。白河上皇が僧兵の神輿を引かすいで度々の狼藉に「朕の意のままにならぬのは加茂の流れと、賽の目と僧兵である」とのたもうたが、これは加茂川の毎年おこす水害をなげき、当時博打が盛行したのを怒り、ということであると解釈してこれが新時代の新科学的真正のそれであるといった事があつた。そしてこれが高等学校歴史の真正解釈とされた。僧兵の乱暴を際立たせる為、水の流れと賽の目が人の意にそはぬことをかけただけの言が、こう解釈されてこれが純粹社会科学の解釈なりと云はれたのであるから、ものは言い様だと思つづく思う。そしてそれが眞実の意味をまげてしまふ、とおそろしく思うのである。

## 第五章 ドイツ農民戦争（2）

### 農民綱領一二ヶ條

ドイツ南部に生起した農民蜂起は、様々の要求をかかげ、彼等の結集をはかつているがその中には狩猟權や水利權、木材採權等のなまの要求をかかげて宗教問題をそれとして提起してないものもある（ブラック・フォレスト地方）し、その要求点も一六ヶ條、三四ヶ條、六二ヶ條という風に様々のものにわかれているが、一五二五年三月に出た「全農民階級と農奴の基本的正義の主たる條々」は前文と一二ヶ條からなり、全篇宗教的裏付けをもつた農民の要求となつていて、これが實際上、農民革命の全ドイツ的基盤を形成するものとされた。神、キリスト、福音、愛、平和、統一等の言葉が全篇をつらぬいている。いまこれを要約してみると次の如くである。

## 前文

キリストによる平安と神の恩ちようをキリスト者の人々へ！

ここには、相集つた農民の為の福音を輕べつする機会を求めている反クリスチャンの人々がいる。新しい福音の果實はこうだ。何人にも従うな。あらゆる場所で反抗せよ。最後まで改革し、根こぎにする為、そして、アア、精神的、俗世的權威を殺す為、武器を以て結集せよ。あらゆるかかる無神の邪惡な判断に対しては、ここに書き誌されたこの恥辱を神の言葉からとりさり、またこの不服従、いや全農民の反乱をクリスチャンの態度で許す各條項に於て答えられる。

まず第一に、福音は氾濫と騷擾の為の言葉ではない。それは約束された救世主 (Promised Messiah) キリストの言葉である。そしてその生涯は次のもの以外はない。愛、平安、忍従、そして統合 (新約ロマ書 12:10)。故に、キリストの教えを信するすべての者は、愛し、静安であり、耐え、そして共同する。これこそ全農民の全條項をつらぬく基底である。これらは次の意図の下につくられた。人は福音を信じ、それに従つて生きる、と。

どうして反クリスチャンは福音書を反乱と不服従のものと呼ぶのか？ ある反クリスチャン達、福音書の敵は、福音のかかる要請に反対して起上る。それは福音書のとくところではない。それらは悪魔であり、福音書の最も邪惡な敵である。彼等は自らの不信心によつてこれら悪を刺激し、愛、平安、そして統合はここに踏みにじられ、追放される。

尚、かかる福音書を彼らの條項の中に主義とし、教訓として堅持する農民層はこれにより、不服従、

そして反乱者と呼ばれるべきではない。もし神がその言葉に従って生きる農民達が、そのことを神にのべるのをみそなはずとき、誰が神の意志を否定出来るのか(ロマ書Ⅱ)。何人が神の判断を非難出来るのか(旧約、イザヤ書Ⅱ)。そう、何人が彼に反抗出来るのか(ロマ書Ⅱ)。彼は、イスラエルの子ども達の声を聞き、彼等をファラオ(Pharaoh)の手から救い出した。そして今日、彼は自ら救いの手を差しのべることはないのか。そう、彼は断固彼等を救う。しかも素早い時を以て(出エジプト記Ⅱ: 14、ルカ伝ⅩⅡ: 8)。さてキリスト者の讀者よ、注意深く以下の文字を讀め。そして判断せよ。

これをみてこの農民戦争がキリスト教の福音書にもとを置いたそれであり、全篇を通じて神の福音が改革の動機、目的となつてることがわかる。叛乱そのものも農民が福音を信じ、愛と平和と忍耐と統合を心にもつてその現状からの救いを出エジプト記に求めていることが理解される。いはば福音書、数々のそれら、ロマ書、イザヤ書、ルカ伝等にかたられた神の福音がこの叛乱を導いている。これらを信じている農民にとつて、福音が彼等の解釈を實踐していると云えるのである。

これを領主と農民の唯物史観的対立、苛斂誅求と反抗に要約單純化してしまつたのが、エンゲルスの「農民戦争」である。こうなると先にふれた様に宗教戦争というものは抹殺されてしまふ。史的要素を全く遮断してしまふ。それは歴史の叙述には困るのである。エンゲルスは先述の如く一八四八年の革命をもち、共産主義革命の成就というこゝとで目的をもって宗教抹殺をやっているのだからそれを忘れてはならない。これは特殊なのであつて、歴史を勉強するには夫々の特色と特別の個々の要素を無視してはならないのである。

だから日本では、島原の乱は宗教戦争であるからその要素を明確に叙述し、天草四郎時貞も昔の様に教科書に復活させねばならない。そうしないと歴史を勉強することにはならないのである。

### 福音書と各綱領

これを前文として二ヶ條は個々の農民の要求をかかげているが、それはすべて前文が主張する様に福音書にのつとり、それがそれら要求を提出しているという体裁をとっているのである。だから個々の要求は福音書が当時の農民の要求を自ら主張しているということになる。

第一條 聖職者の言葉は聖書により、福音は眞の信仰に従って傳道されるべし。

第二條 一割税(住区の教会や牧師の費用として住民が所得の一分を収めた)のコーン納入(どうもろこしでの支払い)はやめらるべし。貧者に対する一般税は廃止さるべし。

第三條 農奴に対する課税はやめらるべし。我々は神に仕え、神を主とし、隣人を兄弟とし、己れに施す如く彼等に施す。これ主が最後の晩餐に於て垂訓されたところである(ルカ *iv*, *9*, *v*, *マタイ* *v*, *ヨハネ* *xiii*)。

こうして農民の要求は次々と続いてゆく。それらには、利子の廃止、水、木材、猟、釣魚、土地等の自由獲得や自由結婚等の要求が列擧される。

ドイツ農民戦争を通じて特徴のないま一つの大きな要素は先にもふれたが、皇帝、諸侯、貴族(小領主)等といった支配者の中で農民革命がめざしたのが皇帝への帰一であったことである。これはアルザス・ローレン(*Elsass-*



Lothringen) の農民要求の中にもっとも明確にあらはれる。その全要求は一二ヶ條の要約という要素をもっているが一二ヶ條には農民は最早支配権によつて抑圧されぬ、という激烈な文言がある。そしてそれは領主は最早農民に強制し、抑圧し、要求することは無いとつづくのである。新しい奉仕が要求されることはない、そして何か他のことを要求されてもそれは無である、というのである。そして領主がどうしても農民に奉仕を求めたいときはそれは農民を傷つけない時季と時間内で農民との合意の下でなさるべきであり、それは適当な価格支払いの下でなさるべきである、と主張するのである。そしてさきの要約は、何人も最早如何なる貴族にも領主にも従はない。しかし彼をよろこばずもののみ従う、それは皇帝である、と。

こうしてドイツ農民戦争は英国のヘンリー八世がローマ法王から絶縁して英国国教会をたてた様にこの時期皇帝のもとにドイツ国を統合しようというナシヨナリズムがその主体となつていくことが理解されるのである。このナシヨナリズムは国家統一運動としては究極、ビスマルク (Oto von Bismarck) のそれを待たねばならず、それは三百五十年のときを必要とするのだが、。何れにしる宗教改革が農民戦争を生み、それが国家統一の思想をはぐくんできたとは忘るべきではない。

### 農民重課

農民を蜂起に団結させ、これを導いたものは宗教であつたとして、彼等の蜂起への物質的原因は、領主や教会の徴収する税金であり、その過重さであつた。そのことは言う迄もない。しかしすべての革命や叛乱をこの関係だけの説

明に集約してしまうのは、何度もいうが、革命テーズとしてはいいが歴史としては不可である。

当時、農民は様々の課税の対象であり、都市や商人は徴税の外にあった。領主による農民税は種々のものが課せられていてその種類をあげると、賦役、賃租（小作料）、地租（Gute）、保有地移転料（Laudemien 保有地譲渡の場合の貢租）、死亡相続料（Sterbfällgabe）、保護金（Schutzgeld 領主の「保護」、裁判の際の「弁護」等に反対給付として農民の収める住民税）等があった。農民はその他教会に収める一割税や人頭税等を課せられていた。これが時代の移りかほりと共に追々過重となつていった。

農民は教会に様々の形で緊縛されていて税金以外にも身動きがとれない程であつたが、その主たる畏迫は破門、赦罪拒否、告解、奇跡、聖像、聖遺物、指定参詣聖堂、免罪符等々であつた。法王には一般教会税が支払はれ、傘下の全教会はこれに支配されていたが、聖遺物や免罪符の販売は法王独占であつた。教会の破門が当時如何に死よりもつらい運命を被害者に與へたかはカノッサの屈辱（Penance at Canossa, 1077）の物語りがあまりにも雄辯にそれを示している（ドイツ国王ハインリッヒ四世（Henry IV）が法王グレゴリー七世（Gregory VII）に破門の許しを乞う為一月二一日、雪中にハダシで三日間立ちつづけたというそれ）。国王に於てしかり、一般庶民に於ておや。領主は、農民に対し初夜権をもち、又人々を過酷峻烈ないましめで縛りあげていた。その一端は次の如くである。拷問、耳切り、鼻切り、目のくりぬぎ、指と手のきりおとし、斬首、車裂き、火あぶり、焼ばさみ締め、四つ裂き等であつた。こうした税金や教会法や刑罰で農民は領主や貴族に緊縛されていたが、これが農民の叛乱を引起した原因でもあつた。

当時のドイツの国勢は非常に苦しいものであつて短畧的にみても農業は英国、オランダに、工業はイタリア、フランス、英国に、海上貿易は英国、オランダに夫々凌駕されていた。国内工業の発展はギルドの発達した都市の同職組合的経営が行われ、毛織物、亜麻布の製造、金銀細工、彫刻、火薬の製造等が盛行し、印刷術が発達した。アウグスブルク、ニュールンベルクが当時ドイツの富と贅沢の中心地となつた。

英国、フランスでは全国的利害の連鎖が顕著となつて政治的ナシヨナリズム、中央集権化が進行した。ドイツでは中世国家神聖ローマ帝国がその基盤を失う方向となり、チャールズ五世 (Charles V) は古への権力回復を心にしてカソリック教会をたてて宗教改革に背を向けた。この為、一層、欧州のリアリズムからはなれてしまった。即ち時代に逆行したのであつたが、三〇年戦争以後はさすがにこの傾向をめざす皇帝は出なかつた。この間上級貴族は諸侯ともなつて皇帝から独立する傾向をとり、宣戰、講和、常備軍、租税等に独自性を發揮する。農奴と隸農 (Horige) は土地に緊縛され、彼等は、人身も緊縛し、鑄貨操作等も行った。農民戦争はこうした諸侯に反撥し、皇帝権力の再生を求めた。しかしそれは前にもふれた様に、中世国家と皇帝の再生を求める反動ではなく、新統一国家を模索する新しい近代ナシヨナリズム国家へのそれであり、その胎動であつた。

このとき大きな変化を受けたのは中級貴族であり、統一軍制の発達、一般歩兵の戦力化、その重要性の増大、火器の発達による戦畧、戦術の変化等によつて騎士の存在価値は希薄となり、追々この階層は没落にむかう。下級貴族は、この影響下生活は苦しくなり、彼等は勃興する都市から借金し、また都市を畧奪し、商人層から金品を強奪し、これら戦闘によつてとらえた捕虜釈放の身代金を得る等して社会に無用有害となつていった。

聖職者は直接宗教改革や農民戦争の対象となったが、その原因は司教、大司教、副修道院長、修道院長等が、広大な領地を支配し、教会制度による巨額の蓄財をはたし、自ら帝国諸侯と同等のものとして多数の農奴、隸農をかかえて、前にふれた様々の悪業を行いその威、富共に強大であった為であった。

但し聖職者が独占してきた教育（読み書き）、高い教養の維持等は印刷術の発達、商業の拡大等により知識の普遍化がすすみ、また有力法曹家の出現と彼等による有力な官職篡奪が起つて彼等のシエアは追々縮少していった。

### 都市の改革要求

勃興しつつあった都市は、商業、貿易に従事する商人、ギルドから発達したジャーニマンの製造業や、同職組合的製造業等、様々の工業、商業、貿易、金融等の職種が混在していたが、早くも上流階級（Ehrbarkeit）を生じ、彼等が市の評議会、議会等を独占していた。これに従つて都市住民の階層制があらはれ、貧困層としてギルドくずれの貧窮層、都市に流入してただ居住権のみを認められたプロレタリアート等が出現していた。彼等が都市の改革派となつてそれなりの反抗的運動をくりひろげた。当時の都市の実力は国家全体からみてまだ大きなものでなく、都市の革命派も歴史上農民戦争と違い、かえりみられることもなかったが、農民戦争と結合してその一翼をになつた事は否定出来ない。そのあらはれた改革主張は次の如くであった。（一）法の前の平等、（二）行政改革、皇帝を中心とする国家統一、（三）帝国機構の世俗化、（四）聖職者財産の没収とその貧困層への配分、その国家的一般目的への転用、（五）牧師、聖職者の一般的選出、ふさわしい聖職者俸給の社会的支給、彼等の政治的・法律的職務からの排除、（六）

諸侯、貴族の貧窮層への抑圧禁止。

この他次の主張もなされた。社会国家の構成は①公爵、伯爵、男爵、②騎士、大地主階級、③都市群、④田園社会からなる。これらには平等の正義が施される。但し、公伯爵等は名目的地位を保持するにとどまり、独立の権力を有しない。彼等は統一ドイツの中世的代表である皇帝の單なる職員であり召使いであるにすぎない。かくして各封土に所属していた①條約締結権、②司法権、③貨幣鑄造権、④徵稅權はすべて廃棄される。⑤全国的規模の司法權の組織化、帝、⑥金取引稅 (customs dues)、通行稅、すべての直接、間接稅は廢止される。⑦全国的規模の司法權の組織化、帝國最高裁判所 (Kammergericht) の下に四從屬審、四地方裁判所、四自由裁判所 (so-called free courts) が設立される。これらは都市群と各村落共同体の開かれた裁判所であり審判法廷である。⑧貴族と彼等の徵稅查察官の為の司法的機能を果す特別高等裁判所が許容される。これは一六人の著名人、判事と陪審員から構成される。ローマ法の博士達は大學で講義する以外司法的機能を果すことは嚴禁される。⑨土地抵當權についてはすべて二〇年間の利子に相当する金額の即金払いで償還され得る。

これが都市から出た改革要求の大綱であった。この作成は都市とそして村落の代表達の間で討議決定された。その始動はウエンデル・ヒプラー (Wendel Hipler) とフリードリッヒ・ウェイガン (Friedrich Weigand) であった。前者はホーヘンローエ (Hohenlohe) 伯家の總執事であり、宮中伯家 (Palatinate) の首席執事であった。後者はマインツの大司教の有名な執事職であった。

ブルジョア民主主義

この要求の激烈な事はまことに瞠目に値いするもので、ブルジョア革命の先駆をなすと云える。これが近代の自由、平等、独立のナシヨナリズム国家を頭に描いていた事は疑いを入れない。農民戦争の一二ヶ條と異なり、宗教色払拭して全僧職の特権廃止を打出している。全僧職のローマからの離脱と国家的組織統制がはからはれる。税金の主要徴集がやめられ、開かれた裁判所がうちたてられる。貴族の徴税も陪審制で統制される。土地の自由所有への道も開かれた。

こういった割期的なブルジョア・デモクラシーの主張が高々と朗々と打出されたことは、まことに興味深々たる事実でなければならぬ。ただエンゲルスの「農民戦争」ではこれらの主張には一顧だに注意が払はれない。エンゲルスの「ドイツ農民戦争」は先述の意図で書かれた資料集にすぎないからそれ以外の観点から批判するのは当たらないと言はれようが、前にもいった様に彼の名前が大きすぎるので「ドイツ農民戦争」が当時民衆騒擾のすべてをおおっている歴史書と誤解されやすく危険である。ドイツ農民戦争の宗教戦争性を抹殺しこれを共産主義革命への奉仕の理論としてしまえばこうしたブルジョア・デモクラシーの先駆的革命的主張はとりあげられ得ないのは当然の事となる。農民戦争もブルジョア・デモクラシーの革命的先駆的主張もみなつつこみで一緒くたにして、領主の苛斂誅求と農民の反抗という事実に要約し、一々の農民戦争を大小克明に掘りおこし、記述し（これはこれで大へんな仕事である）、共産主義革命への起爆剤とするのはそれなりにいいけれども、何度も云うが、それでは純粹科学的社会主義論という看板には大いに恥じねばならない。

ドイツ農民戦争には種々の傾向と主張、背景があり、もとより複雑である。ちなみにいえば、高利貸し天罰観、牛

飼い、耕作、ぶどう栽培、干拓、荒地開墾の奨励、土地の集団所有等は中世的共產主義思考からのそれなどといはれることがある等、種々考えねばならぬ要素は多い。

## 第六章 宗教戦争の前提

### 物質的欲望と精神的欲望

何故人々は宗教をもち、その下に結集するのか。これは有史以前からの人類の謎であろう。あの情熱、あの献身、あの結集、あの研究、あの犠牲はどこからくるのであろうか。世の中宗教を持たぬ民衆はなく、民族はない。無神論者も親の死の前にはたじろぐ。

宗教は二つの面をもっている。一は、自ら祈り、死に対面し、永遠の彼岸を求める。他は集団としての宗教で、わがほとけ尊し、と排他的であり、拡張的であり、攻撃防禦、戦闘的である。

一と二は全く矛盾相反する。死を媒対として永遠の彼岸を求める静かな境地と命を犠牲として自宗の拡張を願ひ、たたかう修羅の実行とである。人間の思索、行動の動機は欲望とその充足である。しかしこれは動物としての人間だけに固有なものではなく、植物もその種の保存と拡張の動機と実行には動物と何ら選ぶところはなない。従つて生物は欲望の代名詞である。人間は欲望を物質面と精神面にわける。物質面の欲望を充足するのは限られた人々だけである。何時の時代でも権力者と特権者、そのとりまきだけである。人間の大部分庶民は最初から物質的欲望をあきらめる。

説  
彼等の欲望のおもむくところは精神で、その主たるものが宗教である。宗教を欲望と呼ばないで、何とか難有い範ちゆうで処理しようとするのは無駄、有害である。

論  
しかし権力者の物質的欲望は自身のビジュアル以外の五感の満足とは関係ない。例えば秦の始皇帝は宏荘、宏大な宮殿を営んだ。咸陽宮は三六宮二四院を数え、阿房宮は東西八百米、南北一五〇米、その上広大な始皇帝陵を築き、その下に大殿、享殿、寢殿をもつ三宮六院の地下御殿を仕つらえた。その宝物殿にあった宝物は、三〇万の大夫が三〇日をかけて運び出すあたはず、という有様であった。これらを破壊、焼きつくしたのは後に出了項羽霸王であったが、それはそのとき燃えつきるまで九〇日間燃えつづけたという。しかしこれだけの大事業を興しても人間の五感を満足さす物質的欲望を充足さすというのは平成の世界の人々の方が始皇帝より上かも知れぬ。但し一五億の人々が今日一弗以下で毎日を生活していると云い、一〇億の人々が文字に親しんでいないという。前者のこれはBC三世紀のことであるが、こうした関係は世のはじめと共にあり、宗教はここから起ってくる。皇帝といえども死はさげられず、また彼は宗教を国家統一の為に利用する。

### 地獄、極楽

各々の宗教には様々の物語りとおしえがあるが、庶民が物質的欲望充足からきりはなされて一番願うのは矢張り祈りと、彼岸に於ける精神的快樂の世界である。(例えばキリスト教を例として) この意味に於て地獄極楽の断は、最もよくこういって庶民の宗教心をみたくくれる。キリスト教に於てこれがあらはれるのはダンテに於てである。旧



約、新約にも地下の苦しみのくへの描写は種々あるが、そこからの救いの思想はあまりみられない。悪しきものなげこまれる Gehenna、墮落天使の住む Tartarus 等の思想もある。しかし極楽の思考を提出して庶民の彼岸に於ける再生を示したのはダンテが最も強烈であった。旧約、新約聖書にある様々の物語り、バベルの塔、ノアのはこ舟、モーゼの十戒、ユダヤ民族の出エジプト記、サムソンとデリラ等はキリスト教の物語りでまた民族の伝承であるけれど、イエスの誕生(クリスマス)以外はあまり庶民の心をうたない。しかしダンテによる地獄、極楽の話 (Divina Commedia 「神々の即興詩」(神曲))は庶民の精神的欲望を満たす手段そのものであった。これがキリスト教を庶民に力強く結びつけるよすがとなった。キリスト教はその外伝に於て再生した。キリスト教のルネッサンスである。「神々の即興詩」が世界第一等の文学となった所以である。

### ダンテの宇宙

ダンテの世界はプロレマイック (Prolemaic) のそれである。ダンテは宇宙を極楽 (Paradise) と煉獄 (Purgatory)、地獄 (Inferno) の三つ (Prolemaic system) に分けた。そして勿論極楽を最高の理性と徳の生きるところとした。ダンテはこれをベアトリーチェ (Beatrice) に対する永遠の愛、彼女による彼自身の浄化のあらはれるところとした。ダンテのベアトリーチェに対する愛がこの物語りの背景にある。ベアトリーチェを描くことでこれを描いたのである。ダンテがベアトリーチェとはじめて会ったのは九才の時で、その九年後に再会して、彼は彼女への恋のとりこととなった。しかし双方とも夫々の結婚をする。前者は Gemma Donati と、後者は Simone de Bardi とである。しかしこの様

説  
な恋は当時よくみられた。例えばゲーテ (Goethe) はある廷臣の妻 Charlotte von Stein と激しい恋に陥入り、彼の彼女への愛の手紙が一五〇〇通に及んだ、と云はれている。一つ言えば、ゲーテの女人遍歴はとても聖書の正視し得るところではない。

ダンテの三極のうち煉獄はカソリックには久しい描写であるが、そこに於て死者は金まみれと悪しきならいをきよめられる。煉獄は南半球の水にとりまかれ、天に向つて屹立し、地水風火 (earth, water, air, fire) の四元素の上たち、そのいただけは神性の繁った森林におおはれている七つのテラスと側狭道をもった山嶽である。

ここでダンテは天から下降したベアトリーチェに会いざんげと浄化の儀式を受け、天の星にいたる純潔と価値を得る。

煉獄の上に天国がある。パラダイスは彼により九つの同心円をもつ天界にわけられる。月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星、恒星、そして第十天 (Primum mobile) である。この第十天はすべての星の外側にいてこれらを包摂し、そこには祝福された人々が神秘のバラの中に住み、夫々の功業 (their merits) によつて神のビジョンを視得る。そしてこれらがダンテにも現れる。ダンテはこの最高天に於てそこに戻つたベアトリーチェに会う。彼女は天の栄光に座している。そして彼女につづき聖バーナード (St. Bernard) により、またバージン・マリア (Virgin Mary) の仲介によりキリスト教の秘奥、神とキリストの統一と三位一体の直観をさずかるのであつた。

ダンテは地獄も描いている。それは実は極楽と煉獄の前にとりあげられている。地獄は暗黒の深淵であり、また九界に分れ、地下の中心に向つて段々狭隘化する地底のくにである。そこには紀元三〇〇年に至る迄の詩人、哲学者、ヒーロー、皇帝、法王、政治家、牧師、女皇、名ある婦人、二派のフロレンス市民といった人々がうごめいている。

彼等がそこに落とされたその罪はアリストテレス的分析によれば三つである。無節制 (incontinence)、悪意 (malice)、獸性 (bestiality)。それらは罪と罰の重大性によって夫々の場所に置かれる。地獄の底、神からの最遠点にルシファア (Lucifer) がいる。三つの口と六つの翼をもつこの怪物は、神性の三位一体に対し、異形の三位一体をあらはす。彼が天界から落下したとき地獄の深淵が口をあけた。ルシファアはキリストを売ったユダ (Judas)、カエザルを裏切ったブルータス (Brutus) とカシウス (Cassius) をその三つの口でムシヤムシヤとくつつている。

これがダンテの地獄極楽である。この物語りがキリスト教徒の心線にふれたことは先にのべた。尚ダンテは現世の改造を願い、みちびきとして理性と徳行を強調し、また愛こそは太陽をも如何なる星をも動かす、と説いている。

### 往生要集

いま衆生の願いは、現世の物質的欲望の実現からたれ、精神的欲望をみたすことに向けられ、ここから宗教が起り、死を媒体として彼岸の安楽な永遠のやすらぎを得ることにあるとして、これに最もふさわしい思想は地獄、極楽のそれである、とのべた。それは日本にもある。

キリスト教に於てもこの思想は聖書の中にもみ出されるがその集大成はダンテの地獄極楽の思想であった。それは究極、現世的理念と徳行のすすめ結びつくが、日本の場合、地獄極楽の思想はそれとして具体的で且直接的である。そのおこりは平安初期（九八五）の比叡山の僧源信の著した「往生要集」六巻にある。これは一切經から九五二の引用をして集大成されているが、極楽、地獄の思想が図解の如く明瞭にのべられている。源信にはこれと共に主要著

説 作二五巻がある篤学の仏者であつた。極樂を叙している。「浄土を讀シタタへんに、猶し一毛もて大海を滯シタタらすが如し。一

には聖衆來迎の樂、二には蓮華初開の樂、三には身相神通の樂、四には五妙境界の樂、五には快樂無退の樂、六には引接結縁の樂、七には聖衆俱会の樂、八には見仏開法の樂、九には隨心供仏の樂、十には増進仏道の樂。かくのべて、

その一々に解説を附している。詩といわんや、樂といわんや、仏語を以て人を感動さす一代の名文である。地獄については八つに分ち、等活、黒繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無間とし、これもその一々に説明を附している。その恨みの相、おそろしきこと、屍血のおどろおどろ、たとへかたなき恐怖の文学となつている。この書物は極樂浄土思想史の中での金字塔と稱され、これ程広く民衆に愛讀された仏書は無い。これはまた中国に逆輸入されて彼の地の仏法興隆に資し、道俗貴賤男女の帰依の対象となつた。これは、それ程民衆が精神的再生の場として安樂にして苦患のない極樂を求めること如何に切実であつたかを示すものである。本論にとりあげる一向宗は、法然の浄土宗、親鸞の浄土眞宗、蓮如の親鸞祖述というすべてこれらの因縁からおこつていのである。ここに一向宗の信仰の根源があつた。即ち極樂は西方浄土で、ここに弥陀三尊があり、人々の未來に赴くところとして、瑠璃、玻璃をもつてつくる壯麗な院殿があり、前面の池には池底に金紗をしきつめ、水は清浄で赤、白、黄といった方三尺にも及ぶ大輪の蓮の花が咲きみだれて、常時妙香がただよい、空中妙なる樂の音がひびき、色あざやかな鳥が舞つてゐる、という有様であつた。この浄土に阿弥陀信仰に生きる人々はその称号をとなえることによつて再生をはたすのである。

このとき弥陀の本願というのは他力でありすべての自己を放下して弥陀の力にすがつて成仏するのである。自力難行道他力易行道というが、それは嘘であつて、すべてを捨て弥陀の本願にすがるといふのは命を現実に捨てることを意味し、これは中々決心がいる。ダンテの極樂が理性と徳行をとくことからきているのと全く対象的である。そして

親鸞、蓮如共に弥陀の本願をとき念仏一遍悉皆成仏、悪人成仏す、アニ善人に於ておやと説いた。なやめる凡夫として南無阿弥陀仏と唱えれば成仏出来ることと断固宣言されればそのたよりのあること無上である。ここに浄土教としての一向宗の面目があった。

地獄は、八大地獄をたてに八寒地獄を横にして描かれる。この地獄極楽を絵にしたものがあり、これが眼に信仰の入るものとして大いに流行した。極楽はさきへのべたものを絵柄にしたものだが、地獄はその下に描かれ、血の池地獄や、無間地獄、食物を喰べようとしたら火になるとか、未来永劫に刀をふるって相闘う修羅道地獄、火の車に乗せられて鬼に疾駆される地獄や人面獣身のそれ、男どち針の山に頂上の美女にさそはれてのぼり、針につらぬかれて血だらけに苦しむ図などがある。この絵は大きな掛け軸となっていて、たて二米、横一・五米は多い。絵の上部に彎曲して人の一生が描かれ、右から誕生、童児、童女、青年、壮年とつづく、花をかざして我が世の春を謳歌するのが、最後は鳥辺野に捨てられ、野犬に屍体を喰いあらされて白骨となる様が描かれている。これは捨身無常の観念をうつして人をひんしゆくさす。

これ等は悪業を重ねれば閻魔の前に引出され、地獄に落とされ、善根をつめば極楽に再生することを教えるもので、宗教の原点であった。日本では煉獄はなく、また一旦地獄におちれば、そこから救はれ得ないのが特徴であった。

（以下次号）

（参考文献はこの項の論説の終わりに一括掲載の予定。）

